

公衆衛生看護婦 1890 1930

ナース・カバンの看護婦たち Part (2)

杉 山 恵 子

本論は「公衆衛生看護婦 1890 - 1930 ナース・カバンの看護婦たち」の後半部分である。(前半は人文学部紀要 No. 15, pp. 18 - 35, 2002に掲載。)注は前論文からの通し番号を使用した。

学校看護婦の誕生

移民と向き合う小さな派出看護婦詰め所として出発したヘンリー・ストリート・セツルメントの看護活動は、病院、医師、診療所から独立して独自の活動を求めて展開してきた。「家庭看護」を最優先に掲げ、ナース・カバンを携え自ら訪ね歩いて、社会から取り残された人々に看護の手を差し伸べてきた。しかし、その経営はつねに資金不足とのたたかいであったことは前号でも言及した。それゆえ、保健局と教育委員会がヘンリー・ストリートの看護婦を学校看護婦として雇ったことは、ことのほか喜びをもって迎えられた。それこそ彼女たちの理想の具現者だったからである。資産家の支援などに頼るのではなく、「公的資金」で支えられ、しかも学校という次の世代を担う子供たちの健康管理を指導することで、子供たちに教育の機会を確保する。ただの教育ではない。「アメリカ市民」になるための教育を施すことが彼女たちの手に委ねられたからであった⁽³⁷⁾。

ニューヨーク市による学校児童の検査は1897年から始まっている。しかし医師によるそれらの検査は、フォローがなく、おざなりの報告がなされていただけだった。そこで、学校看護婦は子どもをいかにして治癒し、学校に戻すかを第一に考えた。学校教育を市民教育の拠点と考えていたからであ

る。学校の検査で発見された病気は、訪問看護婦が移民家庭にはいりこみ指導を徹底することで、治療と再発予防の教育がなされたのであった。その効果は劇的で、1902年に1万562人の児童が登校を禁じられたのに比べ、翌年には、わずか1101人にまでその数が激減した⁽³⁸⁾。

学校看護婦導入の発端はヘンリー・ストリート・セツルメントの創始者リリアン・D・ウォルドが保健局長のアーネスト・レーダールに進言したことだった。そしてウォルドが保健局に学校看護婦として最初に送ったのが、リーナ・ロジャーズ・スツルーズであった。当時の様子を生き生きと伝える彼女の記述によれば、病名は必ず封をして持ち帰らせることを原則にしていた。子供たちには病名がもれないよう、カルテには数字で記入していた。たとえば2番、4番、6番はともに頭虱で、子どもが病名をあかせないように、複数の番号を使用していたし、どこも悪くない子も番号がもらえなくて「がっかりしないように」、「異常なし」は9番や15番がつけられた⁽³⁹⁾。略語を使用することもしばしばあったため、保健局に移民の母親から苦情が届いたこともあった。看護婦が「栄養不良」と書くべきところを「不良」とのみ書いたためである。怒った母親は、「うちの子は不良なんかじゃない。自慢の頭のいい子なんだ。ほっといてくれ。」と書き送ってきたりした⁽⁴⁰⁾。異文化接触の最前線をみせるやりとりである。

健康チェックの次は清潔教育の徹底であった。ことに力をいれたのは鼻かみドリルと歯磨きだった。校庭でかけ声とともに、「はい、右、はい、左」と訓練しているのをおもいうかべるのは、なんとも楽しいが、子供たちにとって清潔教育の徹底は、親のやりかたが否定される、恥ずかしい体験だったようだ。ハンカチを常備することも教室では徹底していて、移民少年のひとりがハンカチを忘れて教壇に取りに行かされたときの恥ずかしさをのちに述懐している⁽⁴¹⁾。ハンカチは清潔文化、アメリカ文化のシンボルであった。歯磨き指導も徹底しており、「光る歯」が将来を約束する「ビジネスの財産」と言い切っている。セツルメントでの教育を学校に持ち込んだ点で特徴的なのは、子守りをする女の子を対象にした子守り指導クラスだろう。移民の母親に子育てを教えるように、将来母親になるかれらの教育はもっとも重視さ

れた。非常にきめこまかいプログラムと課題が並んでいることからその熱意のほどが窺える。沐浴のさせかた，離乳食の与えかたはもとより，性教育も含まれていた⁽⁴²⁾。いっぽう，監獄へ送るような事態を防ぐセーフ・ガードとしても学校を位置づけていたため，教室での厳しいしつけがうたわれており，学校看護婦は常に「將軍たれ」⁽⁴³⁾というスツルーズスの言葉は有無を言わず子供たちを指導した様子をうかがわせている。

なかでもスツルーズスがページを割いてその必要性をといたのは，扁桃腺・アデノイド手術であった。のちに看護婦が専門用語を使うことは医師から厳しく制限されるのだが，ここではそうした不安もなく，医学的見地から手術の必要性が語られている。呼吸がさまたげられることで，だらしない顔立ちとなり，やる気のない，姿勢のわるい，まるでサルのような形相になっているこどもが，手術によって，背筋も伸び，みちがえるように勤勉になるとイラスト入りで解説している⁽⁴⁴⁾。勤勉なアメリカ市民になるためには，扁桃腺もアデノイドも不要なのであった。そして，この手術こそ，親の同意も得ず，説明もないまま行われたことで，ロワー・イーストサイドに暴動がおこるのである。1906年のこの暴動は，手術後，口から血を流して下校する子どもたちをみて，ロシアでの迫害の記憶がよみがえったのだろう，学校で虐殺がおこっていると恐れた母親が大挙して学校に石を投げたのであった⁽⁴⁵⁾。移民を管轄下に置こうと躍起になって，全員に強制的に実施した当時の保健局の横暴を伝える事件だが，移民家庭と学校との間に入って，円滑な児童への指導を謳った学校看護婦制度が実際は成果が謳われたほど機能していなかった例だろう。

しかし，学校を訪ねるたびに，教室の混雑，間取の不備，暗く湿った教室，換気の悪さなど建物の不備を指摘しそれらの改善を要求していったことも事実である。それはやがて教育界や保健局への批難へと発展していった。そして読み書きよりも，健康衛生教育の優先と充実を訴えるようになっていったのだった。また，家庭訪問のたびに，移民が子どもを学校へ送れないのは，病気のためばかりではなく，靴がない，洋服がない，子守りをさせられている，働かされているなど，移民家庭を取り巻く現状にも目をむけないわけに

はいかす、「公衆衛生看護婦は社会問題にまで目を向けられるかどうかが一番の資質である。」と説くにいった⁽⁴⁶⁾。これはのちに、公衆衛生看護婦の定義に関わる問題となった。また、看護現場をはなれ、母子保護法や児童労働禁止等、社会改革運動へと展開していく礎になっていった。

しかし、学校看護婦は家庭、学校、その社会的背景が見える要にいと、自らを位置づけながらも、保健局にも、教育委員会にも影響力を及ぼせない無念とフラストレーションをスツルザーの著書は訴えている。訪問看護を世間に知らしめ、市民教育の中心としたい意気込みも、保健局、教育委員会の双方からの微妙な位置ゆえにリーダーシップがとれないのであった。

こうした問題を抱えながらも、1902年に誕生した折は、わずか12人だったものが、1909年には、ニューヨーク全市で141人の学校看護婦が雇われるまでになっていた。

「マザー・メット」 - メトロポリタン生命保険会社看護婦

学校看護婦となって、公的機関への進出をはかったものの、より広範なサービスの拡大と財政的な安定を求めて、保険会社と協力関係を結ばなくてはならなかったことは、訪問看護婦サービスの置かれたさらなる微妙な位置を物語るものだ。前号でも述べた通り、病院、診療所から独立して訪問看護派出所を運営することがセツルメント設立の動機であった。またその運営に関してもあらゆる慈善団体から自由でありたいというのが、当初からの方針であった。しかし本当のところ、保険会社との契約はありがたかったのだ。

メトロポリタン生命保険会社との契約は1909年の夏、ヘイリー・フィスクとウォルドの間でかわされた。同社の被保険者を訪問し、健康教育をするというものだった。ウォルドにとっては、のちにみるようにビジネスの現実と向き合わなければならなくなるのだが、まずは訪問看護を利用してほしいという思いからであった。「慈善ではなく、保険の名のもとに、貯えのないものにはじめて看護サービスが届くようになったのです。」⁽⁴⁷⁾と当初、手放しで喜んだ。メトロポリタン生命保険会社は、「マザー・メット 母なるメトロポリタン」と、のちに移民たち呼ばれるようになるのだが⁽⁴⁸⁾、それほ

どまでの保険会社への信頼と親しみやすさは、今日では想像を絶するものだろう。それを可能にしたのが訪問看護婦による、きめこまかいサービスであったことは間違いない。

フィスクという人物は、カトリック教徒で、人生半ばに、「貧しい人々をたすけよ。」と神の啓示を受けたといい、それを保険業界で実施した。フィスク自身は自らを「神を恐れ、支払いは現金で、腹には何もためない、現実主義者」と言ったが⁽⁴⁹⁾、恵まれない人々への思いとビジネスでの金儲けが両立する、きわめてアメリカ的な存在だ。保険業は南北戦争後、一家を支える夫が家族を思うしるしとして、中産階級層をターゲットに、定着し始めた。「死」そのものが、神の罰ではなくなり、保険は残されたものの貧しさを軽減する当然の準備と考えられるようになっていたからである。19世紀末には、保険会社が増加し、他の企業同様、いかに大口の客を獲得できるかを巡って過当競争が続いていた。ことに大きな保険会社は、当時暴露記事屋と揶揄された記者たちの標的だった。集めた金の不正利用、投機体質、不正な契約の数々が告発されていた⁽⁵⁰⁾。メトロポリタン生命保険会社は大口を指す保険会社と反対の方向を歩んだ。つまり、小さな保障で貧しい人々をターゲットにしたのである。500ドルの保険を週35セントの低価格で販売した。一件、一件まわって、働き手の死亡時の保険を売り歩いた。働き手とは、貧困家庭の大半がそうであったように、女、子どもを含めた保険だった。乳幼児死亡率が高かった20世紀初頭、幼子の棺が買えること、共同墓地に家族が葬られるのを避けること、故国とおなじ埋葬ができることが、移民たちにはもっとも大切なことだったのだ。この移民たちの「異国」での心情をとらえた方針は、大成功だった。20年（1879 - 1900）でメトロポリタン生命保険会社は、業界18位から4位へとの上昇があった⁽⁵¹⁾。

フィスクのビジネス・パートナーとなったリー・フランケルは化学の学位をもつソーシャル・ワーカーで、ユダヤ移民地区での結核の蔓延に心を痛め、活動を続けていた。このフランケルを通して、ウォルドの訪問看護婦との協力関係がうまれるのである。

1909年当時、ヘンリー・ストリート訪問看護サービスは市内に11個所の拠

点（他に結核療養施設や野外施設を郊外に4箇所）を持っていたが、ここから、市内をくまなくめぐり、被保険者へのサービスを開始した。3ヶ月のお試し期間中に、被保険者からの感謝の手紙がメトロポリタン生命保険会社に殺到した。実際、看護婦を送った地域の新規契約者は増加し、死亡率が低下したため、会社はただちに、訪問看護婦サービスを一番の売りに宣伝した。他社もこの成功をみて、追従した。おかげで、保険会社からの収入は30%から50%を占めたといわれる⁽⁵²⁾。

一方、拡大とともに浮上したのは、経済効率という問題だった。実は、フランケルは、効率主義を工場に導入することによってやっきであった時代の寵児、フレデリック・テイラーの信奉者だったのである。「効率重視」はこの時代の改革者の特徴といえるものだが、経費のかかりすぎを理由に訪問看護の実態調査なるものを開始した。たとえば、ボルチモアの訪問看護サービスは、一日平均6回の訪問、それに比べて、ヘンリー・ストリートでは12回、治癒までの平均期間、ボルチモア36日、ヘンリー・ストリート12日。効率のよいニューヨークに軍配をあげ、ボルチモアの看護婦は無駄話が多いのではなどと疑問の声をあげた⁽⁵³⁾。

こうした保険会社の動きに看護婦たちは反発した。訪問時間が短ければよいというものではない。戸口でではなく、家に入ってこそ、正しい指導ができる。患者の「社会的背景」、これは訪問看護婦たちに変好まれた言葉だったが、を知ることこそが正しい看護の前提であって、そこが只の健康調査との違いであると主張した⁽⁵⁴⁾。しかし、コスト削減に躍起であったメトロポリタン生命保険会社は持病持ちへの訪問は看護婦でなくても、資格のないもので充分だと提案するにいたるのである。この資格のない人々と訪問看護婦の違いは、その定義をめぐってのちに問題になるのだが、あれほど望んだ訪問看護の有効性が認められ、拡大すればするほど、皮肉なことに、彼ら自身が苦境に置かれる状況となっていくのだった。「社会を担う有能な母親」に徹する訪問看護婦と「ビジネス世界の有能な働き手」をもとめた保険会社のせめぎあいとみるむきもあるが⁽⁵⁵⁾、訪問看護婦がビジネスに無縁かというところでななさそうだ。なぜなら、生まれた余剰資金は、ちゃっかりイリノ

イ・セントラル鉄道会社やブルックリン輸送会社に投資しているのである。時代にあった「有能な」金銭能力を実は身につけていたということになる⁽⁵⁶⁾。しかし、安定した資金作りに奔走する姿に変わりはない。

公衆衛生看護協会誕生と暗雲

資金不足と闘いながらも、ウォルドが蒔いた訪問看護婦の種は、確実に東部都市部で広がり、1901年に48の団体に訪問看護婦を雇っていたのが、1914年にはその数2000もの団体におよんだ。いまや訪問看護サービス団体のほかにも、先にのべた保健局、教育委員会、保険会社に加えて、デパート、企業、病院、セツルメント、牛乳配布・乳幼児委員会、公園、ホテルに訪問看護婦は雇われていた⁽⁵⁷⁾。また、学校看護婦、結核看護婦、乳幼児看護婦、とよばれ細分化が進んでいた。こうした展開を受けて、各地の訪問看護婦団体を組織する動きが起きた。前述のフランケルら、雇い主からの圧力に抵抗出来ないくやしい思いもその背景にはあったとされる⁽⁵⁸⁾。ウォルドを中心に1912年公衆衛生看護協会が誕生した。ウォルド自身がナイチンゲールの使った「ヘルス・ナーシング」という語に「パブリック」の一語を加えたのだとその名の由来をウォルドの側近であったラヴィニア・ドックは回想している。そこには「看護が、州や連邦のサービスとして、州や連邦の組織に組み込まれるのではなく、それらのよき協力者として、広範囲にかつ効率よく組織されるようにとの願いがこめられていた。」⁽⁵⁹⁾という。「家庭」を第一に考える、伝統ある「訪問看護」の名を残したいという意見もあったが、20世紀初頭の全国的な改革の中であって、より広がりを持たせて、「公衆衛生看護」としたともいう。革新主義運動は絶頂期を迎え、一翼を担ってきた女性たちの社会への貢献は、公衆の名のもとに、看護婦という新しい職に寄って、社会に知らしめた華々しい結実をみたのだった。これによって、『季刊訪問看護婦』(1909 - 1912)は、『季刊公衆衛生看護』と名を改め、さらに『公衆衛生看護』となった。「もう、訪問看護というと、貧しい人達を連想するのは終わりです。これからは、付き添い看護や、病院の個室看護に手の届かない、普通の人達にも、私たちのサービスが行き届くようになるのです。」と

サービスの拡大がそこには込められていた。移民と向き合うなかでうまれた小さな始まりが全国展開を夢見た輝かしい瞬間であった⁽⁶⁰⁾。

しかし、「公衆衛生」とはなにか、看護婦たちの間で定義が曖昧であった。たとえば、「訪問看護」か、「公衆衛生看護」か、という議論が看護婦たちを悩ませた。具体的なかたちで議論されたのは、第一次大戦を終え、体勢が変化し始めたころだ。第一次大戦は当時の多くの改革運動のモメンタムを失わせたが、公衆衛生看護においても例外ではなかった。看護婦たちの揺れる思いを象徴するのが紙上討論だった。それは、ミネソタ保健局のH・W・ヒルが「訪問看護」は病人の世話に徹するもので、公衆衛生看護とは違うのではないか、という主旨の意見書を『公衆衛生看護』に投稿したことに始まる。ヒル自身はのちに『公衆衛生看護婦のための衛生学』を著わし、公衆衛生看護婦がより専門的な知識を持って活動することを薦める人物である。そのヒルに、公衆衛生看護婦たちは一斉に反発した。病人の看護に徹せよというのは、社会的背景を重視する訪問看護の利点を無視する発言だと憤るもの、基本の看護を無視してきたわけではないと弁護するもの、ともに予防医学の最前線を担ってきた教育活動を強調するものなど応戦が続いた。どれもが、移民のアメリカ化をよりスムーズにしてきたのは、訪問看護であるという自負に満ちていて、けっして病人の看護だけではないと主張した。しかし、公衆衛生の名のもとに、仕事が拡大し、これも新しく成長しはじめた、ソーシャル・ワーカーとの区別がつかなくなってしまったことを認めざるをえない者もいた。また、そのような看護婦自身の自信のなさが原因で訪問看護が誤解されるとして、発展する細菌学や衛生学の再教育の必要を訴えた。そもそも、公衆衛生看護の特別な訓練がなされていないのだった。また「公衆」とは「公的資金」への支援を求めるものではないのか、という少数意見もあったが議論されずに終わった。公衆衛生とは、公衆衛生看護とは何か、を問う好機であったが深く立ち入ったものはいなかった。結末は、公衆衛生看護は訪問看護を含んでいる、というものだった⁽⁶¹⁾。

かつて、「我々のやっていることが定義そのもの」⁽⁶²⁾と強気で発言していたころとは程遠く、進む病院看護に立ち後れてきた不安や、ソーシャル・

ワーカーとの競合への不快感が見え隠れしている。教育する立場を強調したが、その対象が移民であったのなら、移民制限が現実のものとなるのはもう間近であった。そうすれば教育する相手がなくなるではないか。

加えてメトロポリタン保険会社との交渉でも話題となった、資格のないものでも看護の一部は充分賄えるとする根強い意見と闘わなくてはならなかった。看護婦はいつも母親の延長線上と考えられていたため、境界はあいまいにされがちだったのである。実際、第一次世界大戦を前にした看護婦不足に、公衆衛生協会は自ら、ヘルス・ビジターとよばれる、「看護婦でも、ソーシャル・ワーカーでも、教員でもない」人々を導入せざるをえなくなっていた⁽⁶³⁾。教育する立場を優先することが、かえって看護以外の人々を呼び込み、それが公衆衛生看護婦の特徴となっていったのである。問題を広く捉えようとすればするほど、病院では不可能だった患者の丸抱えを目指せば、目指すほど、自らの力が拡散するのだった。ざっと看護雑誌をみくらべてみても当初から、その視野の違いが見えているだろう。単純化を恐れずに結論するならば、移民の文化的背景をさぐる様々な記事が見つかるのは、『公衆衛生看護』誌であるし、新しい看護機具の開発や、その使用のマニュアルが満載されていくのが『看護学』誌なのである。地域、文化を視野にいれた看護誌と、病院密着型の看護をめざす方針が顕著になる看護誌との違いであった⁽⁶⁴⁾。

1920年代をもって公衆衛生看護婦の華々しい時代は終わったとする見方もある⁽⁶⁵⁾。拡大と拡散を成功とみるか、弱体化とみるか議論の別れるところだろう。たしかに、第一次大戦後、それまで彼らを後押ししてきた、社会改革の風潮は衰え、能力ある女性たちを集める拠点は、看護以外の分野に広がっていった。だからこそ、彼らの最後のエネルギーが、連邦による、初の母子保護立法シェパード・タウンナー法の成立へと結集していったとみることもできよう。ウォルドをはじめ公衆衛生にかかわった看護婦や女医たちが推進した法だからである。また看護面以外の協力者を得たからこそ可能になった運動であった。拡散したからこそ、看護の定義も、公衆の定義もあいまいだったからこそ、看護婦による母親の教育を通してコミュニティの健康を根

付かせようとした発想が市民の健康を国家的レベルで考えることを可能にしたといえるだろう。病院の外に出たからこそ、可能になった活動と発想の結果といえよう。よく知られているように、シェパード・タウナー法は医師会の反対にあい、その命を終え、クリニックというかたちで看護婦が中心となって指導する母子教育の機会をついえた。「出産」が病気のカテゴリーに入れられたことで看護婦の手から離れ、医師の指導下に入れられたためである⁽⁶⁶⁾。保護法をつくることで「家庭」を守り、「母子」を特別視するという発想そのものの限界が指摘されて久しい。なるほど、訪問看護婦は「聖地」である家庭に踏み込むことが許される特権を忘れてはならないというような記述に出会う⁽⁶⁷⁾。しかし、その母性主義ゆえに、本来の訪問看護が臨んだ、自宅看護の重要性の主張、社会的、文化的な背景も含めた看護の発想、医療と社会の接点を見つめる看護の姿勢を簡単に葬ってはいけないうらう。

一体、病院の外こそがその活躍の場として活動してきた公衆衛生看護婦たちはどこにいるのだろうか。公衆衛生看護婦について網羅的な調査をしたメアリー・ガードナーはその著書に「ひとりではたらくフィールド・ナース」という項目をもうけている。そこでは、都市の拠点から離れ、地方で働く彼らの姿がうきぼりになってくる。全国展開し始めた様子がわかるものの、ここでは、州や地方都市の保健局で雇われたときは必ず、上の人の指示に従うのが肝要であること、小さな団体に雇われたときは、任されたと思って安心せず、運営がどのように行われているかみきわめ、会合には必ず出席して、万が一の時の支持者を獲得しておくようにと助言している⁽⁶⁸⁾。

ことのほか地域の医療関係者とのつながりは重要であり、これも細心の注意を払って臨むように助言している。そこでは、医師との友好関係がなにより優先された。「プロフェッショナル・エチケット」と遠回しによぶ医者を立てる習慣を忘れてはならないとくりかえした。屈折した思いをつぎのように語っている。

公衆衛生看護婦として学んだことや、指導する能力がみとめてもらえなくても絶望することはありません。医者への信頼は、かれの考え方を講

積して変えるのではなく、看護婦自身が、彼の求める、心根の善い、正直な女性であって、患者を清潔に保ち、彼の指示にすみやかに従うことをみせて勝ち取るものなのです。そうすれば、医者は信頼し、最新の用語を使えないにしても、初対面でみせたほど、社会的な問題に無知ではないことを看護婦にもみせるでしょう。そして、いかに整理されていないやり方にしても、彼が健康は大切であると教えてきた努力が、コミュニティにとって何らかの効果を生んできたことも見えてくるでしょう⁽⁶⁹⁾。

医者を選回しに皮肉り、公衆衛生看護が看護婦に授けたプライドと自信の名残を留めてはいるが、カバンをもって開拓していた初期のころの勢いはここにはない。医師の物足りなさ、資質への目配りをしながらも、医療のあり方に発言していく動きは微塵もなく、その関係は常に遠慮と従順を前提にしている。たった一人で孤軍奮闘している姿は、当初ワールドのもとに集った看護婦たちの姿とは程遠いだろう。1931年の調査では、訪問看護婦を雇う団体の68%もが、たった一人しか雇っていない⁽⁷⁰⁾。

不本意な例である。しかし、たとえばタスキーギ梅毒実験で、黒人公衆衛生看護婦、ユニス・リバーズが置かれていた立場を慮ることができるだろう。1932年から1972年の間に、600人も黒人男性に治療と偽って、経過観察の人体実験を続けたこの実験は、人種差別と公衆衛生の点からも、医療の責任からも、行政の責任からも、40年間も見過ごされてきたことも、厳しく問い直されなければならない。しかし、ひとつ言えるのは、リバーズは保健局や医師の指導に忠実であったことだ。何の治療もなされぬまま、死にいたる経過を観察するだけの研究とは、よもや想像だにできなかった。彼女の助けなしにはあれほどの被験者はとても集まらなかったといわれている。まさに「コミュニティ・マザー」として公衆衛生看護婦が信頼されていた証拠だろう。しかし、たった一人で担わなければならなかった重荷はとてつもなく大きい。そして、患者との密接な看護関係は、悲劇を生む危険を孕んでいる⁽⁷¹⁾。

ウォールドのもとに集った，明るさと自信に満ちた訪問看護婦たちによる活動は，1933年にウォールドがしりぞき，1940年に亡くなると，4年後の1944年，ソーシャル・サービス部門と訪問看護部門に分裂した。ウォールドの頭の中では，二つは常に同じもので，どちらが欠けても，不十分であったろう。両者の境界のあいまいさこそ，補い合ってこそその強みであったからである。また本来ネットワークを象徴し，繋ぎ止めるはずの，公衆衛生協会は1953年に解散し，看護教育連盟と看護大学協会として新しい一歩をふみだした。素人メンバーのいる公衆衛生看護協会はアメリカ看護協会から合併を拒否されたからである。また，公衆衛生看護が強調してきた教育的側面は，エリート主義とも見なされていたという⁽⁷²⁾。加えて，メトロポリタン保険会社との協力関係も1953年，経費のかかり過ぎを理由に打ち切られた⁽⁷³⁾。経済的な基盤を失っては，縮小しか道はなかった。

こうした状況はすでに1937年に予見できたといつてよいだろう。公衆衛生看護婦の拡大は，病院や医師会の反対はもとより，ニューディール期の根強い公的医療への反感にあって封じ込められたからである⁽⁷⁴⁾。しかし外的な環境の変化より，公衆衛生看護婦自身の変化にこそ目をむけなくてはならないだろう。1937年，公衆衛生看護協会の設立25周年の巻頭言は，1912年当時の看護婦を振り返っている。かつてのような，「保護監察官，テナメント・インスペクター，衛生検査官，郡役人代理」⁽⁷⁵⁾であった時代は終わりを告げたとし，次のように書いた。

1912年の看護婦は長いスカートに大きな帽子をかぶり，家庭に入ったものです。帽子も脱がずに看護をしている姿に，思わず笑ってしまいます。カバンはいまよりずっと重くて，中身も的をえない簡単なものばかり。多分，あのころは自転車でした。そして，患者の記録も夜遅く，紙の切れ端に書き付けただけのものでした⁽⁷⁶⁾。

カバンはすでに時代遅れの象徴であり，中身を誇らしげに語ったころの，訪問看護婦の思いはもうすでにここにはないだろう⁽⁷⁷⁾。

おわりに

訪問看護婦は「家庭」に入り、看護と衛生の知識を広めることで、医療から取りこぼされた、貧しい移民やアフリカ系アメリカ人に手をさしのべてきた。それは公衆衛生看護婦と名をかえ看護婦たちの、全国的なネットワークへと発展した。その姿は、もっとも安上がりな、ソーシャル・コントロールの手先ともみなされてきた。しかし、見てきたように、行政も、病院も整わないなかで、アメリカの混乱期を最前線で引き受け、財政難のなかを奔走してきた。不十分とはいえ、彼らの理想とする看護国家を目指そうとしたのだ。気がつくやうに、高度化する病院の看護現場から取り残され、孤独な闘いをしいられていた。公的な支援のない中、妥協もやむを得なかった。当時の思潮であった移民蔑視、母性保護、効率重視の傾向も、確かに否定できない。しかし、「インスペクター」や「コミュニティ・マザー」という相反するイメージを利用しながら、必要とされる看護を求めて、柔軟な発想と現実的な対応をしてきたことも事実である。産業化の嵐、都市化の波そして移民の到来という国家的な危機に、かれらが「家庭」と「市民教育」を国家の基盤にと、「看護」をキーワードに安定をもとめて奔走した意義は大きい。かれらのめざした、地域に根ざした医療、社会的、文化的背景に目配りした看護、また不十分とはいえ、非人間的な医療現場の否定や医療費の行政負担といった医学とは異なる看護を打ち出した点で、今日の公衆衛生、在宅看護、在宅介護を考える上で彼らの教訓はいかされるべきだろう。20世紀初頭のアメリカを理解するにあたって、看護が発想をリードし、看護が独占できる自由なスペースがあったことを最後にもう一度確認したい。

注

- (37) 看護婦が移民たちにアメリカの理想を伝えるもっとも最前線にいることをウォルド自身が語ったものに Lillian D. Wald, “Best Helps to the Immigrant Through the Nurse”, *The American Journal of Nursing*, Vol. VIII, March, 1908, pp. 464–467. スクール・ナースの

有用性に関しては Wald, “Medical Inspection in the Public Schools”
in Annals of the American Academy of Political and Social Science,
March, 1905, pp. 290–298.

- (38) Lavinia Dock, “School Nurse Experiment in New York”, *The American Journal of Nursing*, Vol. III, 1903, pp. 108–110. Kraut, *Silent Travelers*, pp. 226–254.
- (39) Lina Rogers Struthers, *The School Nurse: A Survey of the Duties and Responsibilities of the Nurse in the Maintenance of Health and Physical Perfection and Prevention of Disease Among School Children*, New York: Putnam’s, 1917, pp. 24–26.
- (40) S. Josephine Baker, *Fighting for Life*. New York: The Macmillan Co., 1939, p. 147. ベーカーはウォルドとともに、学校看護婦の導入に積極的だった保健局に勤める公衆衛生医。その自伝にはウォルドへのライバル意識がみえかくれする。Kraut, p. 245. 看護婦は poor nutrition (栄養失調) を略して poor nut (馬鹿者) と書いた。
- (41) Struthers, p. 69, Selma Berrol, “Immigrant Children at School 1880–1940: A Child’s Eye View.” In Elliott West and Paula Petrik Eds. *Small Worlds: Children and Adolescents in America*. Lawrence: Kansas University Press, 1992, pp. 42–60.
- (42) Struthers, pp. 123–128, 225–226.
- (43) *Ibid.* p. 71.
- (44) *Ibid.* pp. 196–197.
- (45) “East Side Women Riot. Stone Schoolhouses”, *New York Tribune*, 28 June, 1906, p. 14. Alan M. Kraut, *Silent Travelers: Germs, Genes and “Immigrant Menace”*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1994, pp. 228–232. Ewen. p. 143.
- (46) Struthers, pp. 231–236.
- (47) Wald, “Report of Henry Street Settlement 1893–1913.” Henry Street Settlement, 1913, p. 15.

- (48) Ella Phillips Crandall, "A New Extension of Visiting Nursing." *The American Journal of Nursing*, Vol. X, Jan., 1910, pp. 236-239.
は、パンフレットを送り付けるだけの他の保険会社に比べて、貧しい人々に働きかける新しい試みと絶賛している。
- (49) Diane Hamilton, "The Cost of Caring: The Metropolitan Life Insurance Company's Visiting Nurse Service, 1909-1953", *Bulletin of the History of Medicine*, 63 Fall, 1989, p. 417 n. 10.
- (50) *Ibid.*, p. 418. トーマス・W・ローソンが *Frenzied Finance* (New York. Basic Books 1904) で告発していたという。
- (51) *Ibid.* p. 417.
- (52) Ellen Paul Denker ed., *Healing At Home: Visiting Nursing Service of New York, 1893-1999*, New York: Visiting Nursing Service of New York, 1993. p. 13.
- (53) Hamilton, pp. 422-45.
- (54) *Ibid.* p. 423.
- (55) *Ibid.* p. 445.
- (56) Kuhn, Loeb and Co. to Wald Jan. 6, 1919年ではブルックリン運送に3000ドル、イリノイセントラル鉄道に2万ドル、カンザスサザーン鉄道に5000ドルの証券購入用に650ドルのチェックを振り込んだと報告している。
- (57) Karen Buhler-Wilkerson, "False Dawn: The Rise and Decline of Public Health Nursing 1900-1930", In Ellen Condliffe Lagemann ed. *Nursing History: New Perspectives*, New Possibilities, New York: Teachers College Press, 1981, p. 91.
- (58) *Ibid.* p. 93.
- (59) Dock, "Whence the Term 'Public Health Nursing'? : An Authority Speaks", *Public Health Nursing*, Vol. 29, December, 1937, pp. 712-714.
- (60) Brainard, p. 334. Louise M. Fitzpatrick, *The National Organization*

for Public Health Nursing, 1912–1952 : Development of a Practice Field, New York : National League for Nursing, 1975. 引用は Editorials, “The Atlantic City Meeting”, *The Public Health Nurse Quarterly*, Vol. V, July, 1913, p. 8.

- (61) H. W. Hill, “Is the Visiting Nurse a Public Health Nurse?” *The Public Health Nurse (PHN)*, Vol. XI, July, 1919, p. 486, 487. A. M. Brainard, “Why the Visiting Nurse is a Public Health Nurse”, *PHN* Vol. XI, July, 1919, p. 488–490. Bessie A. Haasis, “Public Health Nurse, An Agent of Americanization”, *PHN*, Vol. XI, July, 1919, pp. 493–496. Elizabeth G. Fox, “Is the Visiting Nurse a Public Health Nurse?”, *PHN*, Vol. XI, Aug., 1919, pp. 575–578. C. E. A. Winslow, “The Visiting Nurse, The Best Type of Public Health Nurse”, *PHN*, Vol. XI, Aug., 1919, p. 578. Lee K. Frankel, “Is the Visiting Nurse a Public Health Nurse?”, *PHN*, Vol. XI, Sep., 1919, p. 688–699. “The Importance of True Definitions : Editorial”, *PHN*, Vol. XI, Sep., 1919, p. 692–697. Katharine Tucker, “Whither?”, *PHN*, Vol. XI, Sep., 1919, pp. 700–702. “Conclusion”, *PHN*, Vol. XI, Sep., 1919, p. 703. ヒルの著作は Hibbet Waslow Hill, *Sanitation for Public Health Nurses*. New York : The Macmillan, 1922.

公衆衛生看護の中核であったリリアン・ウォルドやラヴィニア・ドックらが参戦反対運動を展開したことも、戦後の公衆衛生看護の立場に影響を与えている。戦争が看護史に及ぼした影響については別の紙面で言及したい。

- (62) “Editorials” *Public Health Nurse Quarterly*, Vol. VIII, April, 1916.
- (63) E. V. Brumbaugh, “The Public Health Instructor A New Type of Health Worker.” *American Journal of Public Health*, Vol. VIII, Sep., 1918, pp. 662–664. Buhler-Wilkerson. “False Dawn”, pp. 95–97.
- (64) Dorothy Caffin, “Strangers within our Gates”, *PHN*, Vol. XI, Sep.,

1919, pp. 704–711. など民族衣装の写真までのせた企画で好例であろう。

(65) Buhler-Wilkerson, “False Dawn.”

(66) Sheila Rothman, *Woman’s Proper Place : A History of Changing Ideals and Practices, 1870-to the Present*, New York : Basic Books, 1978, pp. 142–153. Michael B. Katz, *In The Shadow of the Poorhouse : A Social History of Welfare in America*, New York : Basic Books, 1986, p. 144. J. Stanley Lemons, *The Woman Citizen : Social Feminism in the 1920s*, Urbana : University of Illinois Press, 1975, pp. 153–180. はともに医師の反対を強調する立場をとっている。いっぽう Beatrix Hoffman, *The Wages of Sickness : The Politics of Health Insurance in Progressive America*, Chapel Hill : The University of North Carolina Press, 2001. は推進する女性たちのなかの分裂を敗因の一因に挙げている。しかし本論ではあくまでもウォルドの超党派的、求心的な役割に重きを置いた。また、Kriste Lindenmeyer, *A Right “to Childhood” : The U. S. Children’s Bureau and Child Welfare, 1912–46*, Urbana : University of Illinois Press, 1997, pp. 103–107. は、攻防が、医師との対立のなかで語られてきたのに対して、子どもの福祉を病的な面からのみ捉えた法律そのものに問題があったと指摘している。法律そのものの歴史と母性主義の限界に関しては、Molly Ladd-Taylor, *Mother-Work : Women, Child Welfare, and the State, 1890–1930*, Urbana : University of Illinois Press, 1994, Chapter 6. Robyn Muncy, *Creating a Female Dominion in American Reform, 1890–1935*, New York : Oxford University Press, 1991.

(67) “Spiritual Values.” *The Public Health Nurse Quarterly*, Vol. VIII, April, 1916, p. 11–12.

(68) Mary Sewall Gardner, *Public Health Nursing*, 2nd ed., New York : Macmillan, 1933, pp. 266–281. “The Field Nurse Working Alone.”

- (69) *Ibid.* p. 269.
- (70) Karen Buhler-Wilkerson, “*Left Carrying the Bag : Experiments in Visiting Nursing, 1877–1909*”, *Nursing Research*, Vol. 26, Jan/Feb, 1987, p. 44.
- (71) James H. Jones, *Bad Blood : The Tuskegee Syphilis Experiment*, New York : Free Press, 1981. Allan M. Brandt, “Racism and Research : Case of the Tuskegee Syphilis Study” In *Sickness and Health in America : Readings in the History of Medicine and Public Health*, eds. by Judith Walzer Leavitt and Ronald L. Numbers, Madison : University of Wisconsin Press, 1997, pp. 392–404. Darlene Clark Hine, “They Shall Mount Up with Wings as Eagles’ : Historical Images of Black Nurses, 1890–1950.” In *Women and Health in America*, ed. by Judith Walzer Leavitt, Madison : University of Wisconsin Press 1999, pp. 475–488. Hine, *Black Women in White*. pp. 154–156. Susan L. Smith, *Sick and Tired of Being Sick and Tired : Black Women’s Health Activism in America, 1890–1950*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1995. 全体像を見直す試みは , Susan M. Reverby ed., *Tuskegee’s Truths : Rethinking the Tuskegee Syphilis Study*, Chapel Hill : University of North Carolina Press, 2000.
- (72) Barbara Melosh, *The Physician’s Hand : Work, Culture, and Conflict in American Nursing*, Philadelphia : Temple University Press, 1982, pp. 143–157. Louise M. Fitzpatrick, *National Organization for Public Health Nursing, 1912–1952 : Development of a Practice Field*, New York : National League for Nursing, 1975, pp. 166–201. Hamilton, “Faith and Finance”.
- (73) *Image : Journal of Nursing Scholarship*, vol. 20, No. 3, Fall, 1988, p. 127. 経費の面のみならず , 看護婦の採用がもうイメージの向上にも繋がらないとした保険会社の調査結果を引用している。

- (74) 医師会の反対とアメリカに置けるその体質に関しては, John Duffy, “The American Medical Profession and Public Health: From Support to Ambivalence”, *Bulletin of the History of Medicine*, Vol. 53., Spring, 1979, pp. 1-22. さらに Buhler-Wilkerson, “Public Health Nursing: In Sickness or in Health?”, *American Journal of Public Health*, Oct., 1985, vol. 75 No10, p. 1159. では, 医師会のみならず, ボランティア団体が仕事の範囲が狭められると公衆衛生看護婦の拡大に反対したとつたえている。
- (75) “What’s Changed?”, *Public Health Nursing*, Vol. 29, June, 1937, p. 341.
- (76) *Ibid.*
- (77) 第二次大戦後, 看護を廻る状況は郊外化や高度医療の発達に伴う, さらなる病院の拡大と整備によって変化する。但し, 1948年において, 白人看護婦の53%は病院勤務となったが, 黒人看護婦は看護資格を持つものの2%のみが病院勤務であり, 依然としてフィールドの比重が大きい。黒人看護婦の病院勤務が50%を越えるのは1960年代になってからである。本論では取り残されるイメージが強いが, 地域で患者と密接に関わる看護婦像および産婆像は西部, 南部地域をその対象とし研究がさかんである。たとえば, Susan L. Smith, “White Nurses, Black Midwives and Public Health in Mississippi, 1920-1950”, Darlene Clarke Hine, “They shall Mount Up with Wings as Eagles”: Historical Images of Black Nurses, 1890-1950”. Emily K Abel and Nancy Reifel, “Interactions Between Public Health Nurses and Clients on American Indian Reservations During the 1930s”, in *Women and Health in America: Historical Readings*, Judith Walzer Leavitt ed., Madison: The University of Wisconsin Press, 1999, pp. 444-458, pp. 475-488, pp. 489-507. などが, 地域での役割を評価しその重要性に目をむけている。1940年以降の看護史全般の動向を説明したものに, Joan E. Lynaugh and Barbara L.

Brush, *American Nursing : From Hospitals to Health Systems*. Malden : Blackwell Publishers, 1996. ヘンリー・ストリートの看護部門のその後に関しては, Shirley H. Fondiller, “The Promise and the Reality : Visiting Nurse Service of New York 1944–1993”, in *Healing at Home*, Pp. 16–24. が縮小期を乗り越え, メディケア, メディケイドの導入後, 保険局や病院と連携して地域と関わる姿を伝えており, そのコスト・パフォーマンスの高さを強調している。その点をもっとも評価して訪問看護サービスの有用性に言及したものが, Susan M. Reverby, “From Lillian Wald to Hillary Rodham Clinton : What Will Happen to Public Health Nursing?”, *American Journal of Public Health*, Vol. 83, December 1993, pp. 1662–1663. しかし, コスト・パフォーマンスだけが訪問看護サービスの本質でないことは見てきた通りである。今日, 日本でも, 「在宅」看護の名のもとに, 家庭看護が見直されているが, コスト・パフォーマンスに偏った議論は避け, 看護文化全体を視野に入れて議論されるべきだろう。また近年新しい病原菌の発見や結核の再燃, グローバル化した人々の交流が公衆衛生に携わるものに新しい課題を突きつけている。20世紀初頭に展開された公衆衛生看護婦の活動の見直しは時代を超えて意義のあることであろう。